

リヒャルト・ワーグナー(1813~1883)の作品が音楽の領域を越えて広く影響を及ぼした経緯については、改めて述べるまでもない。若き日のニーチェがワグネリアンであったことは、人のよく知るところであるが、「構造主義の父」とされるフランスの文化人類学者クロード・レヴィ=ストロース(1908~2009)も、実はその一人である。自身がいわゆる「ワグネリアン」であることを著書やインタビューの中で度々述べているが、ワーグナーの音楽は、音楽的嗜好のみならず、「構造」という発想にも多くの影響を及ぼしている。

「構造主義」の発想は、ソシュール、ヤコブソンの言語学、フロイトの精神分析、マルクスの社会主義思想、そしてブルバキの現代数学などに由来すると説明されることが多い。彼らが導きだした問い(答えではない)は、ラカン、アルチュセール、バルト、フーコーなどといった、一般に「構造主義者」と一括される思想家たち(無論、彼ら自身はそう考えていない)を生み出すこととなった。ただ、レヴィ=ストロースの『神話論理』を読み解く上では、ワーグナーとの関係も看過できない。

とりわけ四部作《ニーベルングの指環》のライトモチーフの分析については、その後ナティエとの間に有名な議論があったが、その発想は現在でも様々な分野で応用可能である。オペラの研究だけでなく、アニメのモチーフの研究にも有効だろう。例えば、オペラ『蝶々夫人』とアニメ『君が望む永遠』には、どちらも「丘」という重要なモチーフがあり、それぞれは作品内において、物語の有機的連関を形成する役割を担っている。本発表は、レヴィ=ストロースがオペラを観るように、あるいは音楽を聴くように神話を讀んだことに倣い、神話を読むように、あるいは音楽を聴くように、オペラとアニメを読み込む試みである。